



その12

都市から読み解く里山 薪炭からマツタケまで

大阪市立自然史博物館 佐久間大輔

今日、私たちが里山と呼ぶ空間をどのように

利用し、維持管理していくか。多くの場合、保全活動の担い手たちは地域でボランティアを募り、管理しようとして、ボランティア活動にはとても見合わないその労力に苦戦してきた。こうした活動の基底には「里山が地域の農業にのみ深く根差した環境として、集落の営みの一部として自給自足的な利用により維持されてきた」という「誤認」があるのではないだろうか。自然を収奪してきた工業化以前の人間と自然の関係は調和的であったという里山へのおもいを湯本貴和、大住克博両氏（2011年）は「憧れやロマンチズム」と断ずる。

我々を取り巻いていた里山空間は多分に経済的な性格を持って経営された空間なのである。森林の権利は複雑であり、そこをどう使うのかという管理権は複雑な歴史と駆け引きによって決定された。とくに古くから荘園として営まれ、武家、朝廷や貴族及び社寺、そして問屋など商人といった利権が複雑に絡み合う近畿においては一筋縄での理解が及ばない。住民は古くからの権利を時に都合よく持ち出し、上訴などをして、領域内での山林の利用権を固める。そうした中で立ち木に関する権利、柴や草に関する権

利、火を使う権利、マツタケやワラビに関する権利、水の権利、「やまばたけ」として利用する権利などがそれぞれの地域でローカルなルールとして確立され、管理、経営されてきた。ここでは、そのようなローカルに理解するほかに里山の「遠望的な構図」として、都市需要に向けた流通により維持されていた近世から明治の里山という状況を描いてみたいと思う。

自給自足ではない里山

木材を大量に使う時代、当然のことながら都市はその木質資源を全て周辺地域に依存していた。大阪の市中の木材に土佐藩が大きな影響を持っていたことはよく知られるところだが、同じように大量の薪炭もまた四国を始め、中国地方（山陽側）、そして九州から大坂港にもたらされていた。『大阪諸色商売物員数并代銀寄』から大石慎三郎氏（1966年）が整理した「正徳四年大阪移出入商品表」により1714年の流通を眺めてみよう。

大坂へ諸国から運ばれた様々な品にまじり「掛木」（ウバメガシやアラカシなど重さで取引される薪）、「結木」（東木ともいう、クヌギなど束で取引される薪）、そして炭が掲載され

る。どれくらいの量かと言えば「掛木」31,092、294貫つまり約11万6600ポンド、金額にして130,363両。「結木」17,485、464束、これもざっと1束12ポンドで換算するとおよそ21万ポンド、22,945両に上る。炭767,814俵、これは1俵19キロ換算で1万4600ポンド、35,769両。なかなかの物量だが、金額にしてもこれら3者を合わせると米の移入額の三分の一ほど、材木の半分強、全取引商品のおよそ5%になるので相当重要な産品となるだろう。

いずれにせよ、相当量の薪や炭が船運を通じて大坂港へ運び込まれていたことが示される。では、これらはどこから来たのか。図1は『内務省地理局編纂善本叢書14 明治前期地誌資料』から加藤衛弘氏が作成した資料（1995年）をもとにまとめた明治9年に大阪港、東京港に陸揚げされた薪・炭の移入元を示したものである。明治に入っているが、江戸末から明治初期の状況を概観できる資料と捉えてよいだろう。大阪へは薪が瀬戸内一円と土佐から、炭は紀伊から九州までの太平洋岸の暖地が供給の中心地となっている。一方で、東京へは薪が常陸・下総・上総から、そして炭は伊豆と下総からの

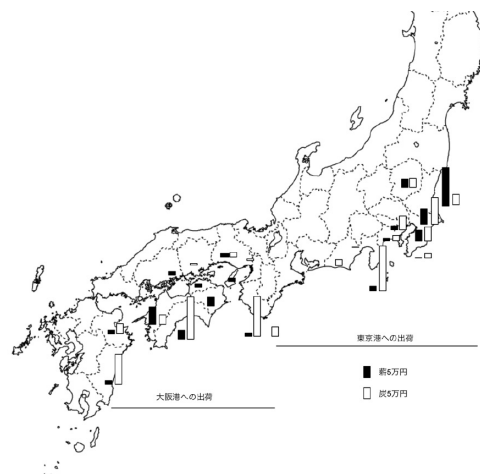


図1 東京港・大阪港へ運ばれた薪炭。加藤氏(1995年)より作図

供給が中心になっている。この資料に載らない近郊からの移入などもあるだろうが、いずれにせよ都市需要を支えるために大量の薪炭が地方から都市へと運ばれていたことが分かる。

かつて千葉徳爾氏が指摘したとおり、薪や炭の需要地は都市だけではない。塩、鉄や銅等の金属、陶器等の生産には大量の薪炭を必要とした。こうした産業によっても、地域の薪炭は大量に必要とされた。このように、里山の薪炭は自給自足のものではなく広域に流通する商品であり、薪炭を出荷することにより現金を得、必要なものを買入れるといった、市場経済に組み込まれた存在だったのである。ここではマクロな状況のみを取り扱ったが、ミクロには藩による統制、薪問屋による価格統制や流通支配、苗木代などの貸し付けや先行投資、村内での権利分割、集落内の共同積み立てのような「講山」など様々な制度や複雑な要素が絡み合って生産

と流通が成り立っている。里山の管理の変遷を理解するためには現場だけでなく、このような消費地との距離や流通経路、藩や問屋の力関係を含めた理解も必要になる。

植生に影響する都市需要

薪炭の流通は経済の問題にとどまらない。産地間の競争は薪炭林の高品質化を追求させる。薪は樹種により明らかに価格が変わる。掛木として高値で売れるのはウバメガシ、アラカシであり、次いでマテバシイが続く。これらは白炭の炭材としても優秀だが、薪としても高級品だ。結木(東木)として上質なのは、クスギやナラガシワである。コナラに比べ、3割近く値段が高かったという。更に、クスギはコナラに比べ細かい枝が少なく、薪にできる割合が多い。薪にならない枝も柴として商品になるが、その価格は河内地方に残る方言で、「そんなもん『しばねうち』やで」(大した値打ちがない、の意)との表現があることで推して知ることができらるだろう。幕末の農書「農業余話」には、クスギの有用性と山林での植樹などが掲載されている。更に大阪・北河内での聞き取り調査ではアベマキは薪としても炭としても低品質で嫌われ、売り物にならないために積極的に切り倒しクスギを植えていたという。

明治後期になると、田中長嶺氏らの活躍により各地でクスギの栽培が広がる(図2)。良質な菊炭を焼くための手引き、更にシイタケ栽培の技術伝承を行い、あわせてそれらのために必要なクスギの栽培法を広めたのである。鉄道に

よる輸送網も広がることで、より発達する産業や都市の需要を全国の里山が支えていくことになる。

状況から考えて、瀬戸内海の島々や紀伊半島の海辺に茂るウバメガシの林は、かなり選択的に利用されてきた結果だと思われる。植林と選択的な伐採、萌芽管理などにより純度の高い同齡林が形成されている。海岸植生の萌芽管理というより、ウバメガシという商品作物の栽培に他ならない。ウルシやカキ、ミカンなどの栽培とそれほど変わらないものと言えよう。

強い利用圧によって閉鎖した森林としての維持が難しく、草山として維持された場所も少なくなかった。森林が破壊されたことではげ山とも呼ばれるが、大抵はアカマツの疎林に下草や低木が茂った状態である。そして、地域住民はこの草を刈り取り、飼料や肥料として日常的に利用し、更にはアカマツも材や高温用の薪炭と

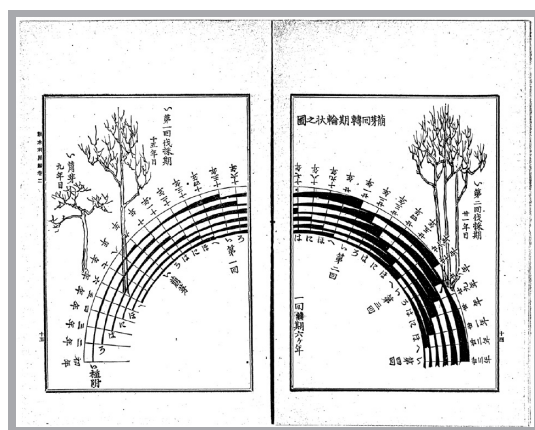


図2 「散木利用編第2巻くぬぎ」より。著者の田中長嶺氏はたくさんの著書とともに各地で指導を行い山村の経済振興を図った。

して利用した。こうした草山も都市との経済関係の中で形成された植生である。草山環境が大阪や京都の周りだけでなく、瀬戸内から中国山地まで広がっているのは塩や鉄を含め、流通にこれらの地域が組み込まれていた結果である。都市に収奪されていたという見方をするか、里山を経営して村々が潤い、維持されたと考えるか。後者の視点も重要である。

きのこの流通

薪や炭に比べ、きのこはなかなか流通の難しい商品だ。本誌7、8月号にも掲載されていたボルチーニ（ヤマドリタケ）はほぼ同じものが北日本に、ごく近縁とされるものが西日本を含む全国に分布している。味は引けをとらないという意見もあるが、日本産のものが商業流通しているのを見たことはない。理由の一つは梅雨明け頃に発生するこのきのこは虫がつきやすく、腐敗しやすい、という点にある。イグチ類やタマガタケなど野生の美味なきのこは数多いが、これらは発生した日の昼頃にはたくさんのが虫がついてしまう。ちょっとしたあたり傷からいたんでしまう。地域で採集し消費するか、地域内で加工までを完結させるかが必要になる。加工場を維持するためにはそれなりの量を採取、集約する必要がある。これだけ森が広がる現代の日本で野生きのこのマーケットが広がらないのは採取者組織や流通網を築くのが困難だからだろう。

しかし、例外がある。マツタケやシメジ、シイタケなどだ。17世紀中頃の金閣寺の住職の日

記には様々なきのこの記事が載るが特にマツタケは克明な記録が残る。マツタケは古くからの贈答品でもあり、マーケットも発達した。摂津名所図会には大阪、天満の松茸市を描画している（図3）。シメジ類もそれに次ぐ存在だろう。秋遅めという発生時期も関係しているのか、先のイグチなどに比べると、マツタケやシメジははるかに虫害の少ないきのこだ。このために流通が可能だったのかもしれない。乾物になるシイタケやキクラゲ、そして晩秋から早春に流通するヒラタケやマイタケ、シウロも比較的流通させやすかったのではないだろうか。

やや時代は下るが明治前期産業発達史資料に「明治7年府県物産表」がある。明治政府が各地の生産力を把握するために、どのような産物がどれくらいいる量、出荷額規模で流通している



図3 「日本山海名物図会 天満市側松茸市」



図4 明治初期のマツタケ及びシイタケの主産地（出荷額上位各20府県）。『明治7年府県物産表』より作図。明治7年当時の行政区分で印を打ったので現在の府県境と一致しない

のかを把握できる資料である。この資料にも、きのこは案外たくさん掲載されている。多種が流通している府県、数種類のみ府県などがあるが出荷量と出荷額が表記されたこれらのきのこにはマーケットがある、ということに他ならない。この資料を基に、最も広範に産出の見られたマツタケとシイタケの主産地を追ってみた。マツタケは痩せた土地に生えるマツの根に菌根を形成する共生菌、シイタケはほだ木につくられる木材腐朽菌である（この時代にはまだおがくず栽培は行われていない）。ことにマツタケは腐植の発達したマツ林ではベニタケ類などほかの菌根共生菌との競争に負けてしまい、きのこを作らない。果たして得られた主産地の分布はこの特性を反映したものとなった（図4）。マツタケは瀬戸内海から近畿にかけての地域を主産地とし、気候的にマツ林が広がる易い中部と北陸が加わった。シイタケは先ほどの

炭や薪の産地と重なり、更にミズナラを原木とする東北が加わった。シイタケの流通額は先の正徳四年の統計では軽く昆布を凌駕している。里山の産物は薪炭以外にも先に例示したようなきのこ類をはじめ、ワラビやゼンマイなどの副産物も流通し、全国の山村の暮らしを潤していた。薪炭林としての単機能でなく、多面的な供給機能を発揮してしっかりと都市の食文化も支えていたわけである。

文化的サービスで都市と里山を結ぶ

全国の里山はこうした第1次産業としての生産の場であるとともに、第3次産業といえるような文化的サービスの場ともなっていた。マツタケ狩りである。摂津名所図会(図5)「松茸狩」に描かれた人物は農民のいでたちではなく、商家の家族と従業員たちである。大阪市中から現在の高槻市にあたる

金竜寺山まで船と徒歩で出かけるそれは、一大レジャーだっただろう。こうした山は地域の入会権が絡んでいるので実入りが地域にも

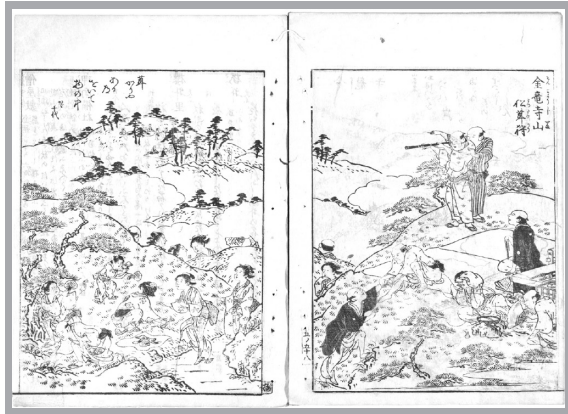


図5 「摂津名所図会 金竜寺山松茸狩」



図6 昭和10年ごろの阪和電鉄(現JR阪和線)のチラシ(風間美穂氏所蔵)

あつたに違いない。山向こうの一団が望めるような見通しのよい風景は柴刈りや草刈りによる利用圧の結果である。マツタケがこうした環境を好むきのこであることは先に書いたとおりである。明治期にも与謝野晶子が少女期のマツタケ狩りの思い出をエッセーに記している。大正から昭和にかけてこうした行楽としてのマツタケ狩りは更に大衆化する。各鉄道会社は現代のミカン狩り同様に都市住民をマツタケ狩りに誘った(図6)。もちろん鉄道会社だけでなく、地域もその利益を得る。ここでも都市住民が里山の供給サービスだけでなく文化的サービスを享受していたわけである。このほかにも京都の祇園祭の縁起物である粽(ちまき)をつくるために、北山地域からチマキザサの供給を受けている例などが本誌でも紹介されてきた。物流では捉えきれない里山と都市の結び付きは幅広く、深い。

里山の成り立ちを考える上で、都市との結び付きは無視できない重要な要素であった。都市と結び付いた里山は薪や炭だけでなく、きのこも、その景観や空間すらも経営資源であった。それでもなお、その空間に豊かな生物多様性が維持されたことこそ、持続可能性を追求するヒントがあるように思える。これは今後の里山を考える上でも重要な視座になるのではないだろうか。里山で活動するボランティアも、観客会やレジャーで訪れるのも都市住民である。自然との結び付きに欠乏感を感じる都市住民に、具体的に何を提示すれば里山により関心を向け、労力や代金を提供してくれるのか。大人向け商品なのか、家族向け体験なのか、投資案件としての魅力なのか。そうした里山の魅力を引き出す経営的視点を抜きに、里山の維持管理は難しい。集落や狭い地域内だけでは未来を拓くことは、なかなか困難だ。都市と農村の両者の持続可能性を探る上で果たしてどういう結び付きが正解なのだろうか。里山の来し方を改めて見つめてみたい。

参考文献

- 大石慎三郎(1966年)「正徳四年大阪移出入商品表について」
学習院大学経済論集3(1)、107-124。
- 加藤衛弘(1995年)総合解説「近世の林業と山林書の成立」
日本農書全集第56巻 林業1(山田龍雄編)p3-31。
- 佐久間大輔・風間美穂(2018年)きのこから大阪の里山を考えるいくつかのヒント。Nature Study 64(9) 215, 12
- 千葉徳爾(1991年)増補改訂 はげ山の研究、そして西川善介(1978年)林野所有の形成と村の構造―入会権の実証的研究 増補版 御茶の水書房
- 森本幸裕(2018年)チマキザサと里山再生 京都の伝統文化の継承に向けて、グリーン・パワー(476)・・・5
- 湯本貴和・大住克博(編)(2011年)里と林の環境史(シリーズ日本列島の三万五千年―人と自然の環境史―文一総合出版